

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 9 月 11 日現在

機関番号：34604

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K13194

研究課題名(和文) 宗教系団体等が所蔵する幻燈史料の記録化と分析による道徳観成立へのアプローチ

研究課題名(英文) Database Construction for the Lantern Slides of the Religious Group and the Approach to Moral Values Through the Analysis of the Historical Materials

研究代表者

山本 美紀 (Yamamoto, Miki)

奈良学園大学・人間教育学部・教授

研究者番号：60570950

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：宗教団体の幻燈のデータベース化にあたり、救世軍国際資料館(ロンドン)を調査し、日本やアジア関係資料を収集した。また、ロンドンで人気を博した救世軍オリジナル幻燈も閲覧し、幻燈使用の傾向について、日本との比較研究に有益であった。しかし、日英に限らず、現存するガラススライドには、台本などが残っておらず、強調点や、上映年代順による推移などが推測の域を脱しない難点が残った。収集した資料については、関係機関の援助も得、データベースのより広い公開に向けて、ガラススライドに残る人物や事象の整理が進んでいる。平成29年度の調査成果からは、宗教団体による幻燈音楽集会などによる社会福祉的視点の一般化が確認できた。

研究成果の概要(英文)：In order to make a database about magic lanterns of the religious organization, it was necessary to collect references about Asia, especially, Japan at The International Heritage Centre of The Salvation Army in London, Britain. Particularly, the unique magic lantern made by the Salvation Army which was popular in London was useful information for inquiry into differences of the tendency of magic lanterns' trend between Britain and Japan. However all of these old magic lanterns do not have their scripts, so it is difficult to know important parts of their stories or the detail of their history. Furthermore these collected references are being researched their contents to widely exhibit them by cooperation with related institution. Therefore it has been able to notice that the magic lanterns made by the religious organization had a role to generalize the media as tools for social welfare since 2017.

研究分野：近現代日本の芸術文化史

キーワード：幻燈 社会教育 社会福祉 宗教 キリスト教 救世軍 メディア

1. 研究開始当初の背景

「教育と幻燈」に関わる研究は、青山貴子「明治・大正期の映像メディアにおける娯楽と教育」(2008)など、明治前期から戦後を対象とするものまですでいくつかある。他分野においても、これまでに、「岡山孤児院音楽幻燈隊」のような近代日本の児童福祉や慈善事業に関するもの、映画前史としての映画研究分野、思想統制政策や大衆文化を扱ったメディア研究、などがある。

しかし、それらは2002年に和田敦彦が指摘したように、幻燈に関する明治の解説書などからの憶測によるものが中心で、収集したごく一部の史料から苦心して研究成果が捻出されてきたと言わざるを得ない(「幻燈画像史料の保存と活用について」2002)。報告者は、幻燈が明治期に来日した宣教師たちの伝道や教育活動に用いられてきたことから、日本のいくつかの教会やミッションスクールに所蔵されている幻燈ガラスライドやトラクト(パンフレット)等の史料を見てきた。しかし、未だそれらがまとまった形で整理分類されているわけではなかった。一方で、それまで閲覧した明治初期宣教師たちの報告書には、幻燈による聴衆の劇的な回心の様子や、日本人用に新たな幻燈を制作するにあたって、倫理観にまつわる東西のギャップを踏まえた生き生きとした描写があり、「幻燈」が日本の一般大衆の道德観や倫理観に非常に大きなゆさぶりをかけたことがうかがえた。これは、幻燈上映の場として宣教師たちに寺を開放した日本の伝統的宗教側にとっても同様であった。そこには、道德観や倫理観の修正や獲得過程の典型が内包されていると考えられた。

2. 研究の目的

幻燈をめぐる研究の「体系的にかつまとまった分量をもって提示する書物や場がない」(同前)状況はほとんど変わっておらず、研究し難い状況が続いている。そこで本研究期間内には、先行研究及び宣教師らの記録を手がかりに、日本の宗教団体や各地の史料館等に保管されている史料を、道德的・倫理的内容を中心に分類・整理し、データベース化した上で、インターネット上で公開する。で収集・整理された具体的な史料を他分野の知見も取り入れて総合的に扱い、学術的分析研究を行うことで、日本の大衆が既存の文化的背景を保持しつつ、「幻燈」という新しいメディアを通して、他宗教を出自とする倫理・道德観と出会い、地域を超えてそれらのイメージを共有し、今日に続く道德観を成立させていった過程を明かにする。さらに、を踏まえて教科外活動の「道德」の教科化に対するシズンシップ(市民性)教育の意義や哲学的視座を提起することを目的とした。

3. 研究の方法

そこで、本研究では、救世軍が社会教育的に用いた「幻燈」について、特に世界救世軍歴史資料館(WBC)が所蔵する幻燈スライドについて、2015年に現地調査を行った。また、研究期間中、山室軍平記念救世軍資料館での調査を並行して行った。救世軍の資料から始めたのは、日本との関わりが深く、比較対象に耐えうる資料が保存されていると考えられる山室軍平自身が著書『平民の福音』において、当時の日本の庶民に共有されていた既存の道德観・宗教観を踏まえた上での福音の解説を試みているという理由からである。それにより、当時の規範意識の育成とともに、教育的視点を考察すると共に、大衆娯楽を用いた社会包摂の手法について、歴史の変遷の視点を得ようと考えた。

4. 研究成果

(1) はじめに

報告者による本課題以前の救世軍軍歌集(賛美歌集)研究、及び山室軍平『平民の福音』の内容から、救世軍の伝道姿勢が、キリスト教の教えに日本の習慣を近づけようとするのではなく、キリスト教の教えを当時の日本人の信心をはじめとした日常生活や、それを基盤に生じる思いに近寄せて語ろうとするものであった、ということが明らかとなった(山本2016, 106)。さらにそこでは、キリスト教の神を中心としたところから発想される「罪とが」ではなく、まずは平民一般が認識している日常生活の不協和の要因として「罪とが」を設定し、その解消にキリスト教の信仰が効果的だとして、平民への伝道をスタートさせたことが認められる。救世軍によるキリスト教伝道に、実際的な大衆への社会教育の視点があつたことの証明でもあろう。山室の先輩であつた石井十次自身、岡山孤児院の運営には「『国家の領民の育成』『神の業』としての慈善事業」の2つ意味があり(細井2009, 119-121)当時のキリスト教伝道に、社会教育的意識が同時に強く働いていたことが明らかである。

特に日本近代の一般大衆(平民)については、飲酒の解消が社会的課題であつた。山室軍平の活動に宗教的思想と社会事業としての道德性へのせめぎあいを見る葛西が、「しばしば禁酒運動は、単なる宗教的律法主義と誤解されるが、我が国において明治大正期に宗教外の多くの人々を巻き込んだ世俗的運動であつた。禁酒運動はその拡大につれ、社会問題たる飲酒の解消から、禁酒による生活の合理化に力点が移っていく。」(葛西2008, 79)と指摘する通りである。

そのような社会的課題とその主体としてある大衆にアプローチする手段として大きな役割を果たしたのが、大衆娯楽の要素の強い、立派な揃いのコスチュームを着て演奏する物珍しい「楽隊」であり、軍歌・唱歌であり、俗謡だったのである。それらと同時に消費されたのが、大衆娯楽の見世物的要素と学

校や村の集会所での教育的要素を併せ持つ「幻燈」であった。

(2) 救世軍の発祥(ロンドン)と幻燈の使用

ここで、発祥の地ロンドンにおいて救世軍の生まれた背景と、幻燈の使用についてふれておく。

救世軍の生まれた背景

「救世軍」は、1865年にロンドンのイースト・エンドの街角で始められた、社会福祉的活動を伴うキリスト教信仰を持つ団体であり、キリスト教としてはプロテスタントの一教派である。特に顕著な特徴としてあげられるのは、教会組織に軍隊式の階級制が取り入れられており、信徒が軍服を着用しているということであろう。この軍服と軍隊式の組織は、「この世」との戦いにおいて神の救いを実現する群れとしての信仰の証である。

創始者のウィリアム・ブース(William Booth 1829-1912)はメソジスト派の牧師であり、スラム化した当時のイースト・エンドにおける現代のソーシャル・ワーク的働きをキリスト教の具体的な救いの業として行った人物である。19世紀末のイースト・エンドに住むロンドンの貧困層については、以下のように解説される。

1780年代の末、イギリスと西ヨーロッパ全体が経済的な不況に襲われ、80年代になると初めて「不況(Depression)」という語が使われるようになった。都市の中心部に残ったのは、恒常的な貧困と厳しい失業に直面した「最下層民」であった。こうした下層民はスラム街に住み、病氣、無知、狂気、犯罪の温床となった。中略 19世紀の大半を通じて、都市における階級神尾境界線はハッキリと引かれていて、貧しい人々はイースト・エンドの労働者地区に限定され、住宅と職の有無が階級間の境界線をくっきりと目立つものにしていった。(小池/平野 2010, 105)

これがどれほどの貧困を意味するのか、現代日本にいる私たちには想像しがたい。しかし、それは近代都市部のものとしては悲惨を極めたもので、「優生主義者のなかには、〔病氣、無知、狂気、犯罪などスラムにまつわる〕これらの問題は手におえないので、貧民には子供を作らせるべきでないと思う者」や「貧困は人種全体の退化につながる」との主張がされるほどであった(同前)。

そのような中に、救世軍は社会活動を始めたのである。

救世軍の幻燈

ロンドンの救世軍において幻燈が公式に投入されるようになったのは、1891年のことである。その年、ウィリアム・ブースの息子ハーバート(Herbert Booth 1862-1926)によって幻燈用のディスプレイがクリスタル・パレスに設置された。

救世軍の幻燈についてまとめたトニー・フレッチャー『救世軍とシネマトグラフ 1897-1929: 英

国とインドにおける信仰の壁掛け』によると、1892年4月の『士官雑誌 The Field Officer』には、ロンドンの南東部のカンバーウェル(Camberwell)で行われた幻燈上演に、2000人の観衆が集まったことが報告されている(Fletcher 2015, 8)。それでも、最初、救世軍上層部は幻燈の投入を渋った。「それ(幻燈)を使うことで、悪魔と手を組むことになる」というのである。しかし、後になって彼らは気持ちを変え、彼らの集会(Band of love Meetings)に使用するため、規則を改めた(同前)。

救世軍の幻燈の使用は、救世軍本部によって認可されなければならなかったが、平均して40~50の幻燈スライドが、各集会で用いられたと考えられている。初期に救世軍で使用が許された幻燈は、以下5つに分類される。

1>国内外の救世軍の活動

2>聖書の内容

3>ヨセフ物語

4>ドレの聖書物語 Dore's Biblical Pictures

5>『天路歷程』The Pilgrim Progress

である。ちなみに、集会の入場料(鑑賞料というべきか)は、会員は無料でそれ以外は1ペンスだった(Fletcher 2015, 8)。

1894年になると、幻燈スライドのセットが救世軍制作で売り出される(Fletcher 2015, 9)。『オレンジ・ハリエットの生涯』『風の種の種まき(あるいは、再び悪い生活に戻った人の物語)』『ケイトの白いバラ』『イシュマエルの娘』『漁師カール』などの作品が、1894-1895年の売り出しのセットに含まれていた。中でも『オレンジ・ハリエットの生涯』は、30枚のモノクロスライドのセット(33シリング)と、28枚のカラースライドと8枚の歌のモノクロスライドのセット(50シリング)2つのバージョンで売り出された。

このことから、『オレンジ・ハリエットの生涯』が救世軍の中心的なメッセージを伝える、重要なレパートリーであったことがわかるが、どのような物語であったのかは残念ながら不明である。幻燈の研究においては、それに添付される詞書(日本の場合は<説明書>)がガラス製のスライドに比べて残存しているものが少ないと言われるが(小松 2015, 103)、それがこの作品にもあてはまる。しかしながら、この『オレンジ・ハリエット』の上映状況から、物語のメッセージがどのようなたぐいのものであったかの推測はできる。

先に挙げた救世軍幻燈研究のトニー・フレッチャーは、『オレンジ・ハリエット』の上映について、1895年2月の『社会報 The Social Gazette』に掲載された、ミルドレッド少佐 Major Mildred Duff による幻燈上映会の記事を取り上げている。その集会はスラムで行われ、飲酒の害悪をテーマとしたもので、「甘く悲しい『オレンジ・ハリエットの生涯』が、スラム担当の救世軍管理者の優しく穏やかな声によって、優しい人々の目や耳に語られた」という(Fletcher 2015, 9)。集

会には、身なりこそきちんとしているものの、酒の臭いをさせている女性や、随分酔って『オレンジ・ハリエツ』の物語に興奮する聴衆が集まっていた。そして、同じ記事には『オレンジ・ハリエツ』のレビューとして、観衆が物語に促されて決心していく様子がレポートされている。

デプトフォード・スラムの人々は、幻燈に導かれ、ダッフ少佐とそのスタッフ達から大変よい感化を受けた。『オレンジ・ハリエツの生涯』は、ダッフ少佐によって上演された。深くかつ長く印象づけられた。集会は外の4つのパブにも告知され、壮大な更新の後、楽しい時間が過ごされ、2つの魂が神に投降した。(Fletcher2015, 9)

つまりこの『オレンジ・ハリエツの生涯』という物語は、飲酒によって苦勞する女性の姿を通して、社会と信仰を映し出すものであったことがわかる。禁酒運動は、救世軍の活動の大きな特徴であるが、それは単に、「酒をやめる」ということを目的としているのではない。そこには、当時の深刻な社会問題の根源に、飲酒による習慣的な害悪があるという受け止めがあり、禁酒をすることで、救霊を促し社会問題解決につなげていこうとする意図がある。

「スラムの住人」のコメントは、彼らが人生の物語の意味をそこに応用しているということを示している。「10以上の」人の心を動かす物語は、とても低くめられた、地位の低い人々の心に触れるのに絶大な効果がある。これらスラムの住人は、いずれのポイントでもその趣旨を直ちに読み取り、ハッキリと学んでいた。私たちは、そのような人々、つまりオレンジ・ハリエツと同様の境遇をもつ人々のもとに達しなくてはならないと思う。そして、偉大な救いと同じ、不思議な働きを必要としている。(Fletcher2015, 9-10)

私たちは汚れた隣人の惨めさや貧しさに目を止めるのに、幻燈というエンターテインメントの価値を理解した。幻燈集会は、魂の救いに助けとなるものであり、スラムに限らずにぴったりの方法である。(Fletcher2015, 10)

このように、救世軍の文書には、信仰的救いと社会問題の解決が同等に論じられている。またこのことから、彼らは社会問題の坩堝であるスラムにおいて、何よりも人々へアプローチするために、「幻燈」という手段を必要としていたことがわかる。

(3) 日本の救世軍の背景と幻燈背景

一方で日本の救世軍はどのような伝道方

針において幻燈が用いられたのだろうか。

日本における救世軍の曙期に活躍したのは、山室軍平である。彼は、岡山県阿哲群(現在の新見市)に生まれ、東京で小僧として働いていた1887;M20年頃にキリスト教に出会う。その後「一般平民の救いのために」献身し、やがて徳富蘇峯(猪一郎)から新島襄のことを聞いて同志社の夏期学校に参加。そこで郷里岡山で孤児のために働く石井十次のことを聞き、彼を通して「救世軍」につながるきっかけを得た。救世軍が日本に宣教を開始したのは1895;M28年9月のことであり、男女14人の救世軍士官が派遣されて来ていた。山室が訪ねたのは10月の中旬であったが、当初は戸惑っていた山室も、ブース著『軍令及び軍律、兵士の巻』を手渡され、次第に救世軍に傾倒していくようになる。彼はそこに、日本においてキリスト教徒として生きるための指針を見たのである。この書物を得、また救世軍の実際的な活動を見るにつけ、当時のキリスト教全般について「日本のキリスト教が、とかく空理空論に流れて、わたくしどもの日常生活をどんなに営むかというような実際問題を閑却しているのを遺憾」に思うようになっていた。その結果、生まれたのが『平民の福音』である。

本書の特徴は、古今東西の様々な逸話や偉人・有名人のエピソード、日本の習慣、つい最近の事件などの雑多な話題と、聖書の言葉が対等に並んでいることである。さらに、キリスト教の教えに日本の習慣が近づけられているのではなく、キリスト教の教えが、当時の日本の信心をはじめとした日常生活に近寄せられて語られている。

これは先述したように、平民一般が認識している日常生活の不協和の要因として『罪とが』を設定し、その解消にキリスト教の信仰が効果的だとして、平民への伝道をスタートさせた姿勢に通じるものであり、幻燈もそのような内容となっている。

日本救世軍の物語幻燈

救世軍山室軍平資料館で確認されたスライドの中で、日本人を登場人物として聖書と道徳的内容を扱い、物語仕立てで上映されたと考えられるスライドは、6枚である。しかしながら、その経緯も、スライドがどのようなシチュエーションで上映されたかも不明である。そもそも、制作された年代についてさえ、女性の髪型から明治末から大正時代ではないか、という程度で詳細はわからない。

スライドを一見してわかる特徴としては、以下のものがあげられる。

1>聖書の言葉と絵で構成されている

2>4つの地平が存在している

地(この世):主人公(日本人女性)

心の中(魂)=ハート

天(聖霊)=鳩

天と地の間:天使

3>心がハート型、その中の「罪とが」が動物、聖霊が鳩など、具象化されている
本来の順序も不明ではあるものの、ここで

各スライドそのものからわかることに限定して述べておく。

【スライド1】女性、天使、心(目、左上：蛇、右上：孔雀、下左から：虎・蛭(蛙?)・男性・蝸牛・豚・山羊)

聖書の言葉：「人とは外の容姿を見、真の神は心を見るなり」(サムエル上 16：7)

主人公と思われる女性、聖書を指し示す天使、ハート型で示される心、その中にある開いた目と動物とで構成されている。動物は、『平民の福音』で言われる「罪とが」と考えられる。ハートの上部中心に「目」が描かれているが、これが聖書の言葉にある「真の神の目」か、人間自身の「心の目」を示すかは不明。

【スライド2】女性、ドクロ、心(目、左上：蛙?をつかむサタン側天使、右上：蝸牛?を持つサタン側天使、それぞれの動物を抱くサタン側天使)左下のハートの外に「不信仰」の文字。

聖書の言葉：「われ願ふ所の善は之行はず 反て願ざる所の悪は之を行へり」(ローマ 7：15)

女性の背後にあるドクロと、女性とのコントラストが印象的なスライドである。ドクロがニヤニヤ笑っているように見える一方で、必死の形相の女性は剣を構え、心の中をにらみ付けている。心の目は瞑られ、心の内壁をサタン側の天使が占めており、それぞれの天使は「スライド1」の動物を抱きかかえるなどしている。

【スライド3】女性、鳩、天使、心(目、左上から蛇・山羊・孔雀・男性・蛭・蝸牛・豚・虎)

聖書の言葉：「呪われ困苦人なる哉この死の躰より我を救はん者は誰ぞや」(ローマ 7：24)

紙を振り乱した女性は、すっかり疲れ切った様子である。鳩が光を放ち開いた「目」を照らし、十字架を掲げた天使が剣を持って心の中の男性や動物に戦いを挑んでいる。

【スライド4】女性、天使、心(目、鳩、左上から山羊・孔雀・蛇・男性・蝸牛・蛙・豚・虎)

聖書の言葉：「これ我らの主イエスキリストなるが故に神に感謝す」(ローマ 7：25)

動物で表現されている「罪とが」が追い出され、安堵し晴れ晴れとした表情で上を向く女性。天使が聖書を示し、聖霊と思われる鳩が心の中心を占める。

【スライド5】女性、天使、心(目、鳩、聖書、十字架) 追い出された人や動物たち(左上から孔雀・山羊・男性・蝸牛・蛇・蛙・豚・虎)

聖書の言葉：「全き者来る時は全からざる者廃るべし」(コリント 13：10)

動物たちは心から撃退され、代わりに心の中には目と鳩、聖書、十字架が真ん中で縦に置かれる。女性は微笑みを浮かべ、初めて手が描かれる。表情とともに何らかの心理的な

変化、例えば積極性などが表現されているのだろう。

【スライド6】女性、天使、心(帯、はちまき、鎧兜、刀、靴、ぶどう、稲、いちじく?)

聖書の言葉：なし(絵そのものが聖句?)

おそらく、最後のスライドに相当するのではないかと思われる。女性は決意した表情で合掌し、天使が彼女の背後にあって左手を掲げている。天使の左手の先が途切れており、これまでのスライドで天使が持っていた聖書や十字架を持っているのか、あるいは天をさしているのかなどは不明。心の中央に日本の鎧甲が描かれており、帯と思われる紐、右に日本刀、洋靴が描かれている。これらは聖書エフェソ書 6章 13節から 17節だと推定され、だとすれば、消えかかっているが左上に描かれているのは、盾なのだろうか。

また、ハッピーエンドの図であることから、このスライドが最終のスライドの可能性が高い。スライドに「八」の文字があるので、8~10枚セットだったと考えられる。

(4) まとめ - 幻燈上映の場の日英比較を踏まえて

ロンドン救世軍では、幻燈が単なる子供向けのお楽しみや、大衆娯楽のようになることへの警戒感が、後々まで続く(Fletcher 2015, 9)。効果が明白な視覚メディアの使用に、これほどの注意がなされる背景には、大人数収容可能な上映場所の影響が考えられる。というのも、「幻燈」は、当時として決して目新しいものであったわけではなく、集まってくる聴衆や上映場所に、一定の先入観があったためである。

英国救世軍の第1回幻燈上映の場となったクリスタル・パレスは、1851年にもたれた「万国産業製品大博覧会」後、移築されたものである。教育的娯楽成人教育の施設として出発した万博パビリオンのクリスタル・パレスではあっても、すでに相当な年月を、コンサートホールも併設した大人数収容可能な総合娯楽施設として存在していた。一方で、手軽な娯楽施設としてのミュージック・ホールもあり、庶民の日常においてクリスタル・パレスは「教育施設」と「娯楽施設」とがかなり接近・近接していた建物であった。

一方、日本では会場として中心となったのは東京では「神田の青年会館」(神田・YMCA) 青年会館(神田・YMCA) 和強楽堂(神田) 中央会堂(本郷) 横浜ではパブリック・ホール(山の手)というものもあるが、芝居小屋「羽衣座」(羽衣町)もある。引羽衣座は、歌舞伎などもかかる横浜でも伝統ある大きな劇場であった。それらの劇場の広告を見ると、チケットや会費があり、物によっては各小隊(教会)で販売している。幻燈や音楽といった内容もさることながら、料金を支払って入るあたり、参加者側にとっては、ますますその他の娯楽などとの境界はあやふやであったことだろうと想像される。

救世軍の場合、音楽幻燈隊を始めた明治30年代は、商品などの宣伝目標で町中を練り歩く宣伝楽隊、いわゆるジンタが流行した時代であった。宣伝楽隊の宣伝は、見世物小屋の人寄せにも使われ、大阪では鐘や太鼓を用いた街頭宣伝が流行っていたという。まさに、救世軍がやっていた方法は、それに重なるものであり、確かに本場英国に倣った方法であったとしても、道で出会った人々には他の見世物と明確に区別するのは難しかったであろう。一方の幻燈もまた、当時の他の幻燈の用いられ方と同様、一つのエンターテイメントとして成立していたと考えられる。何より幻燈は、江戸時代から続く「写し絵」以来の、女子供の夜のお楽しみ程度のものであった。

日英の比較としてわかるのは、幻燈集會を行うにあたって両救世軍が場としたのは、既存の施設であり、必ずしもそれが教会に由来するものばかりではなかったこと、また、幻燈そのものもつ娛樂的要素と観客層から、娛樂と伝道/教育が近接し、ともすれば他の数ある娛樂との一つとして同等に受け止められる恐れがあったということである。

幻燈が日々消費されるエンターテイメントであり、たとえそれが伝道目的であったとはいえ、その延長で受け止められていたためか、ガラススライドは残るものの、上映された台本はほとんど残っていない。そのため、それがどのような内容であったかを知るのには、当時の『関の声 War Cry』の上映された様子から推測することしかできず、確実な内容をつかむことが困難であることが、この度の一連の調査で確認できた。

このようなキリスト教と社会福祉が密接に繋がった活動は、宗教性をひそめてやがて新聞社を始めとしたメディアなどに受け継がれていく。その活動のきっかけもまた、「幻燈」などの視覚メディアであったと考えられる。本研究の継続は、現代日本のメディアと社会福祉の関係においても、今まで光が当てられてこなかった側面を描き出すものであり、現在すでにその端緒についていることを報告したい。

<参考文献>

- ・青山貴子「明治・大正期の映像メディアにおける娛樂と教育」『生涯学習・社会教育学研究 (33)』, pp.23-34, 2008
- ・Fletcher, Tony, "The Salvation Army and the Cinematograph 1897-1929; A Religious Tapestry in Britain and India" Local History Publications, 2015, London
- ・細井勇『石井十次と岡山孤兒院』ミネルヴァ書房, 2009
- ・小池俊彦 平野亮「<測定>の社会学:ケトレーとブース(1)」『鶴山論叢』第10号, 神戸大学 pp.91-115, 2010
- ・葛西賢太「救世軍の山室軍平と禁酒運動 自助努力、社会事業、宗教的救済のはざままで」『駒澤大学心理学論集』第10号所収, pp79-87, 2008

- ・草原真知子「メディアテクノロジーとしての幻燈」早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編, 土屋紳一 大久保亮 遠藤みゆき編著『幻燈スライドの博物誌』, pp.24-29 青弓社, 2015
- ・長島伸一『大英帝国』講談社, 1989
- ・山本美紀「初期救世軍軍歌と日本製 Tune の登場 - キリスト教の大衆化と近代日本キリスト教音楽文化をめぐって - 」『ウェスレー・メソジスト研究』第16号所収, pp.81-108, 2016
- ・和田敦彦「幻灯画像史料の保存と活用について」『内陸文化研究内陸文化研究. 2』, pp.37 - 47, 2002

5. 主な発表論文等

(研究代表者は下線)

[雑誌論文](計4件)

山本美紀, 研究ノート; 日英救世軍の初期幻燈上映における「場の記憶」の影響力 - 娛樂と社会教化の狭間で - , アジア・キリスト教多元性, 第15号, 2017, 181 - 193

山本美紀, 大衆娛樂と近代社会における人間教育への一考察 - 救世軍幻燈上映の日英比較をめぐって - , 日本人間教育学会誌, 第4号, 査読有, 2016, 125-134,

山本美紀, 初期救世軍軍歌と日本製 Tune の登場 - キリスト教の大衆化と近代日本キリスト教音楽文化をめぐって - , 日本ウェスレー・メソジスト学会誌, 査読有, 2016, 81-108

山本美紀, 山室軍平『平民の福音』および、救世軍所蔵幻燈用ガラススライドにみる近代日本における人間教育と宗教 - 大衆とキリスト教との出会いを巡る一考察 - , 日本人間教育学会誌, 第1号, 査読有, 2015, 65-72,

[学会発表](計1件)

山本美紀, 19世紀末から20世紀初頭における英国救世軍の活動と幻燈 - 社会包摂としての娛樂の機能; 救世軍国際記念館 (International Heritage Center / The Salvation Army) における調査資料の報告 (2015年) を兼ねて、京都大学アジアと宗教的多元性研究会, 2016、京都大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 美紀 (YAMAMOTO Miki)

奈良学園大学・人間教育学部・教授

研究者番号: 60570950